よりよい人間関係を形成する力を高める研究
～「伝える力」の向上を通して～

福島県立新地高等学校　教諭　菊池　良平

１　研究の趣旨

「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省）で示されている高校生のいじめの認知件数は年々増加の傾向にあり、その態様では「冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」が最も多い。本県においても同様の傾向が見られ、生徒が人間関係を築く上で、何らかのつまずきがあると推察することができる。研究協力校の生徒は、心情面では他者とつながっていたい気持ちが強いものの、コミュニケーションの技能が十分に身に付いていない面がある。特に、相手の心情を踏まえながら、自分の意見や考えを適切に伝えることのできる生徒は少ない。そのため、言いたいことが言えなかったり、配慮の足りない言葉で相手を傷つけたりすることがあり、自分の意見を適切に表現することができる「伝える力」に課題があるのではないかと考えた。

そこで本研究では、周囲の生徒と関わりをつくりながら、自分の意見を相手に適切に伝える技能を向上させることで、よりよい人間関係を形成する力を高めることを目指した。

生徒の基本的なコミュニケーションの技能や、「伝える力」を向上させることができれば、生徒は相手を思いやり、よりよい人間関係を形成することができるであろう。

２　研究の概要

⑴　実態把握

「ｈｙｐｅｒ－ＱＵ」、コミュニケーションのアンケート、面談で集団と個人の把握を行う。

⑵　授業実践

授業実践は５回、ＬＨＲで行う。構成的グループエンカウンターの手法を取り入れながら、「伝える力」の向上を主眼とした、コミュニケーションの技能の向上を図る授業を段階的に行う。

⑶　ＳＨＲ実践

前日のＳＨＲでは、予習的な学習を行う。また、翌日のＳＨＲでは、復習的な学習を行う。

⑷　実践の促進を図る取組

研究協力クラスの担任、教科担任との連携を図った取組を行う。

３　成果と今後の課題

⑴　研究の成果

事後調査のＱＵで、生徒が認め合っているかを表す「承認得点」の平均値は上昇を見せた。

⑵　今後の課題

自分が学級で十分に認められていると感じている生徒の実数は増加しなかった。今後は、コミュニケーションの技能の向上を図りながら、本研究で効果のあった構成的グループエンカウンターを通し、生徒一人一人が自他理解を深め、互いを認め合うことができるよう指導を工夫していきたい。